

教育委員会だより ～学(まなぶ)～

11月1日号 ▷文化課 市史編さん係 0566-83-6789

学芸員のひとりごと 二言目

こんにちは。市史編さん係の学芸員です。発刊までにいろいろなことがありましたが、無事に『新編知立市史1 通史編 原始・古代・中世・近世』(菊判795頁、上製本函付)を刊行することができました。これもひとえに、ご協力・応援いただきました皆さまのおかげでございます。あらためまして、お礼申し上げます。

本巻は導入となる知立の地形・地質環境から始まり、旧石器時代から江戸時代までの歴史を時代の流れに沿ってわかりやすく叙述しております。その際、最新の研究成果を反映させるとともに、図・写真・表などの図版もフルカラーで数多く掲載しました。見やすさ・ビジュアルも抜群で、研究者ばかりでなく、紳士淑女、大学生、高校生まで幅広くご活用いただける内容となっております。9月1日から、市役所市民課・歴史民俗資料館・観光交流センターで販売を始めておりますので、是非お買い求めください。

とはいえ、“795頁フルカラーの市史ってお高いんでしょ？ちょっと…”とお思いのディスプレイ前の貴方！

ご安心ください。前回の『学芸員のひとりごと』で、「さらにお値段もお求めやすくてきたらと思います。」と申しあげましたとおり、なんと、県内最安値となる2,000円(税込み)でご提供することができました。学芸員頑張りました。内容・価格ともどもおすすめですので、一度お手にとってご覧いただければと思います。

さてそのような本巻ですが、頁数に限りがあり、載せきれなかったことも数多くあるのです。実際、泣く泣く原稿を削った執筆者もいる次第。今後、講演会や講座などでお話しできればと思うのですが、少しだけ、ここで八橋の寺社と来迎寺の関係についてご紹介したいと思います。

中世八橋宿の景観を復元した第3部第1章第6節5項において、八橋を通る主要道のひとつ拳母道(拳母・来迎寺間)と日吉山王社・無量壽寺の関係について触れ、日吉山王社以南の拳母道を山王社(および神宮寺たる無量壽寺)の参道と評価し、弘仁12年(821)まで遡る可能性を持つ古い道であるとともに、中世に遡る地名からその参道沿いに形成された中世寺院群の存在を指摘しましたが、実は南の来迎寺もそのなかに含まれる可能性が高いのです。

それは来迎寺境内の空間構造を読み解くことで明らかになってきます。来迎寺本堂は現在も東海道のある南向きではなく、東向きに建っています。さらに明治11年(1878)に作成された村絵図(西尾市岩瀬文庫蔵)によると、本堂東側の古城塚のあたりから参道が東にのび、拳母道に突き当たる場所に「旧大門跡」という書付を確認できます。つまり来迎寺は拳母道(山王社参道)に面して造られていたことがわかります。また「国史編輯ニ付明治二十一年一月内務省へ上申ノ下書」には、いにしえの無量壽寺の塔頭のひとつとして「来迎寺」の名前が挙がっており、伝承とはいえども、看過できない情報です。これらのことから、どうやら中世における山王社を中心とした寺院群はその範囲を来迎寺まで含めて考えても良いように思います。

いかがでしたでしょうか。少しでも気になった方は、『新編知立市史1 通史編』を開いてみましょう。